

時代が変わった・・・ そして地域医療は魔法の言葉になった

苫小牧市医師会

とまこまい脳神経外科 小児脳神経外科

たかはし よしお
高橋 義男

私は74歳。戦後4年で生まれ、後に団塊の世代と呼ばれるようになった。時代の影響か、母親や姉たちにお互い様と、自分の幸せより他人の幸せを教え込まれ、身に染みついた。小さい時から家の中で仕事があり、冬のストーブ当番は辛かった。少しでも時間があれば友達の家の手伝いなど、家や周辺での労働は普通であった。そんな中、如何に遊ぶ時間をつくるか、ズルして休むかなど考えて要領を身に付けた。物や場所が無いので、色々な工夫をして遊びを創り出すファーストペンギンが沢山いた。“働かざる者喰うべからず”でそんな生活の中で本当の学びを得た。50数年前は今のようになんて大学に入ってしまうのではなく、自分で飯が喰えるようにと技術を得るために大学に入った。この時代の高校生は現役で合格する者はほとんどいず、浪人が普通で、私は一浪して何とか大学に入った。浪人時代は挫折、ストレスを乗り越え、弱者の気持ちが解って人生にプラスになった。感謝と蛍雪の功もあった。その後昭和が過ぎて、世の中が変わって何もなくても飯が喰える時代になり、便利とテクノロジーと楽ちんに自分が良ければ加わって、子どもは好き放題の訳の分からない時代になった。

医療もその影響を大きく受けている。今から40～50年前までは中～重症であっても地域の中で対応がなされ赤ひげ先生もたくさんいた。医療格差はほとんどなく自宅療養、往診が主であった。ところが医療の効率化、大学、都市大病院の方針などがあり、更に訴訟なども影響して、中央集約となり地域の中で大手術、子どもの手術が行われることはほとんどなくなった。私の専門とする小児神経外科も30～40年前よりほぼ中央集約になった。ところが、子どもの医療は命を救うだけでなく育てることが重要で、長期間にわたる継続医療、見守りを必要とするのである。子どもは地域の中で多くの子ども達とともに育ち成長する。急性期治療が終わったらすぐ地域に帰し、中核病院でフォローする体制がとればよかったのであるが、中央にセンター化されるなどして地域から隔離された（今医療的ケアがどうのこうのと地域移行しようとしているが・・・）。大病をした子どもの命は救われたが育てるを疎かにしたため明らかに子どもの発達は遅れた。私は中央にいた時、治療をしたら1か月ぐらいのうちに地域に子どもを帰したが、受け皿が乏しく、親も子ども孤立した。時代の変化で地域の中で見守りをしなくなってきたことに大きな問題があった。

このような事から、18年前、子どもの未来を守るため、急性期医療だけでなく地域の中で社会適応能力を伸ばすこと、地域内医療・療育連携を充実し地域医療の再構築を試みた。道立小児センターを辞めることになった時、それまで働いていたことを無駄にしないようにと、地域の中に入ることにした。勇んで苫小牧に出てきた。初めの4～5年は新生児脳室内出血、水頭症、中～重症頭部外傷などに対し苫小牧市立病院、王子総合病院、苫小牧日翔病院との医療・療育の連携のもと何とか前向きな地域医療ができ、子ども達の転帰を見事に変えた。

しかし、既に“楽ちん”を知ってしまった人々の過去にしがみつく力に敗けて、形づくられ始めた地域問題解決能力のある小児医療は再び崩れた（Mission Impossible、苫医報81、10-13 2015）。根底にあるのはもともと中央依存の体制と最近の“働き方改革”である。事なかれ主義の地域医療は再び今まで通りの札幌依存となり、検査はするが治療はしない、中央にとにかく患者をまわすなどの形骸化した地域医療が始まった。若い人は習わしに負け、若くない人間は挑戦や努力より看過、利己を好む、口だけはあたかもやっているように語る。地域は集団で生きる動物人間の本質を忘れ、地域問題解決能力を失い、前の医療体制に戻った。更に問題なのはこの実態を何も知らないメディアが地域医療を相変わらず美化することである。

このように地域福祉の先頭に立つ地域医療の現実には厳しく（メディア、医療界のプロパガンダで美しい地域医療の虚像“田舎伝説”はあるが）、若い医師は苫小牧という地域の中に入って呆然とし、長居はしない。“お客様は神様です”などと商売はあっても、まともな地域での医療は難しい。昔は他人を救うために医療をしていたが、今は細々医療をやっている。生活は活気やお互い様を忘れSNSに流れた。

「24時間働けますか？」そんな時代もあったねと思えますか？ 時代が変わって、精一杯がなくなって“地域医療は魔法の言葉”になった。今の流れはあたかも温かなそれがあるような気がする、と思わせる。そんな時代の中でどう生き抜くか？



医者になって50年、仕事してます・・・